

第二部 各論

自殺者の死の理解に関する分析

——自殺者の遺書を中心に——

吳進鐸
李芙鏞「訳」

一 はじめに

韓国社会で自殺問題は、OECD加盟国の中で自殺率一位になって一〇年目であるという事実が示すように、社会の懸案となっている。二〇一一年の自殺者数は一万五九〇六名であるが、自殺未遂者の数はそれをはるかに超えることと推定される。①求人就職情報サイト「サラムイン」(www.samin.co.kr)が二〇一一年二〇〜三〇代の一八三七人を調査したところ、22・5%が自殺を試みた経験があり、深刻なストレスを持っている人は63・3%、自殺衝動を感じる人が42・5%。¹②韓国の教育省が二〇一二年に全国の小中高の学生六四八万人を調査した結果、相談や管理のような持続的な関心が必要な学生が一〇五万四〇〇〇人(16・3%)²。③保健社会研究院の二〇一三年の調査によると、精神健康の高危険群が三六八万人、韓国人のうち27・6%が一生に一回以上精神的に何らかの疾患を患い、鬱病を経験するという。したがって、問題の核心は自殺者

一万五〇〇〇人余り、あるいはOECD加盟国の中自殺率が一位という数値ではなく、経済的・社会的状況の悪化によって自殺者よりはるかに多い潜在的な自殺者が存在するという事実にある。一九九七年の「韓国通貨危機」、二〇〇二年の「カード大乱」、二〇〇九年の「世界金融危機」、そして二〇一二年「ユーロ危機」を経て、今は経済危機を越えて社会危機が持続的に反復されている。社会危機は経済危機よりもっと深刻である。経済的価値の偏りや物質万能主義、家族関係の弱化もしくは解体、頼る所のない老人の増加、暴力的なインターネット文化、ストレスと鬱病の蔓延、既存の価値観の崩壊と新しい価値観の不在など、社会病理現象は一旦生じてしまうとすぐには無くならない。

ニューヨーク・タイムズ紙は「韓国は全国民が神経衰弱にかかる寸前」と報道した。インターナショナル・ヘラルド・トリビューン紙は海兵隊の兵士の銃乱射事件、海兵隊の准尉の自殺事件など一連の事故を挙げながら、「韓国の兵営文化が統制不可能の状態に陥った」と報道した。³ 韓国の人文学界の元老である金禹昌教授も「今の韓国社会は精神的な不幸が日常化されている社会」と診断する。⁴

本稿では「一 はじめに」において韓国社会の自殺現象の深刻さを簡略に提示し、「二 自殺者の遺書に表れた死に対する理解の分析」では自殺者が残した遺書内容の分析を通じて、自殺者は「死ぬことが生きることよりマシだ」「自殺すると苦痛から解放される」というように理解していることを提示する。また「三 自殺賛美論の死の理解に対する批判的検討」においては、『自由死論』を著述して自殺したジャン・アメリーの主張を生死学の観点から再検討することによって、彼の「自殺賛美」がいかに問題のある発想かについて明らかにする。「四 自殺予防の解法の模索」では自殺者の遺書の分析を通じて、自殺者の死に対する理解には大きな問題があることを指摘する。「五 おわりに」では自殺現象の根底には死に対する誤解が置かれているゆえに、生命教育を通じて死と生の質を向上することができれば、自殺予防の土台は自然に築かれることを明らかに

にする。

二 自殺者の遺書に表れた死に対する理解の分析

一日一日生きていくということがあまりにも大変ですよ。毎日毎日死という単語だけを抱いて生きています。今日なら死ぬことができるか。明日が来なければ、という思いから常に死を考えます……。ちよつと前、自殺しようとマンションの屋上に上がったことがあります。飛び降りれば死ぬそうでした。でも、体が動かなかつたです。もう一步踏み出せばいいのに……本当に世の中を生きていくことが辛くて苦しくて、何もかもダメで……いざ死のうとすると怖くなったり震えたりして……昔のことを思い出したりもするし……いつも明るく陽気に笑いながら毎日を生きてきたけれど、もう疲れた。これ以上、未来が見えない。未来のない人生、兄から未来を準備しろと言われた。けれども、今はもう遅い。

息苦しい世の中、息苦しい人生。私は死にたい時が多かつた。息苦しい世の中と息詰まる人生のためである。大人のパパは二日間二〇時間働いて二八時間休む。子供の私は八時半から六時まで学校と塾に通って帰ってから一〇時まで勉強しなければならぬ。二七時間三〇分勉強して二〇時間三〇分休む。なぜ大人より子供の方が自由時間が少ないのか、理解できない。社会は息苦しい。私は海を泳ぐ魚のように自由になりたい。子供はなぜ大人に改造させられながら生きていかなければならないのか。⁷

一番目の事例は二六歳の男性が書いたもので、自殺で死亡するまで最低一年一ヶ月前から自殺を試み、自

殺サイトに持続的に書き込みをした。「本当に世の中を生きていくことが辛くて苦しくて、何もかもダメで……いざ死のうとすると怖くなったり震えたり……もう疲れた。これ以上、未来が見えない。」彼はこのようにして生を終わらせた。二番目の事例は二〇〇三年一月八日、忠南天安で自殺した人の日記内容の一部である。共働き夫婦の一人息子で小学五年生であった鄭君は、同じクラスの女の子とチャットしているうちに自殺を予告し、一〇日過ぎてから自宅で死んでいるのが発見された。当時、マンションには中から鍵が掛けられたまま鄭君が一人であった。鄭君の残した日記やチャットのメッセージは「自殺」の影に重く覆われていた。⁸自殺者の遺書には、先述したとおり、「生きることが辛い」「生きることが疲れた」「ちゃんと生きたかったが、いくら努力してもうまくいかない」という言葉がよく発見される。また、「死ぬことが生きることよりマシだ」「世の中と決別する」「自殺すれば苦痛から解放される」という表現もよく見られる。

第一、死ぬことが生きることよりマシだ

ちゃんと生きたかった。しかしなんだかそうにはならなかった。いくら努力してもうまくいかなかった……。自分がおかしくなった。バカになった。私がなぜこんなになったか自分でも分からない。成績もめちゃくちゃ落ち、生きる意欲もなく、自信も失った。自分の変化に私自身が耐えられない。一日一日が苦しくていやで、怖くて、楽しい言葉もなかった。私自身が悲惨だ。希望が見えない。私もここまでやりたくないが、仕方ない。両親をこれ以上失望させることは申し訳ない……。しかしそうにはなれなかった。これ以上自分が惨めになるのはいやだ。自尊心も覇気も全部無くなってしまった。中学時代のように行動したかったが、いくら努力してもそのようにはならない。みんなにこんな私の姿を見せて恥ずかしい。これ以上の希望はない。⁹

死にたいと思ったのは一〇〇回以上もある。死んだら終わるか。死んだら安らかになるか。このまま死ぬことには、一五年しか生きていない私の人生があまりにももつたないけれども、ずっとこのように生きるよりはマシだと思った。このままだと残りの人生に全然自信がない。もしこの死に成功したら何と言われるか。反抗心からの衝動的自殺？ それは違う。ずっと前から計画してきたことなのだ。死を決心した人たちは何の希望もない。私は今、生きるべき価値を感じていない。¹⁰

本当に生きたくない。なぜ悪口を言われながら、人の目を気にして生きていくべきか。本当にそのまま死んでしまいたい。自殺したい。¹¹

自殺者は自分の生をちゃんと生きてきたかったけれども、「いくら努力してもうまくいかなかった」と言う。「素晴らしい人になって親孝行」したい欲望があつたにも関わらず、成績が落ちて、生への意欲が消えたのである。結局、死にたくないが、それ以上両親を失望させるのがいやで、「仕方なく」死を選択すると言う。このような内容は自殺者の遺書からよく見られる。自殺者は死ぬより生きるのが大変で、このように生きるのなら死んだ方がいいと判断している。

第二、自殺で「世の中と決別する」という考え

自殺者たちは、生きることが辛いから、自殺すればすべてが終わり、うんざりする世の中とも決別できると考える。自殺して死んだとしてもすべてが終わるわけではないにもかかわらず、このような誤解は自殺者の

遺書でよく発見される。

このように生きるよりはむしろ死んでしまいたい。(アンチ美容整形サイトの会員)¹³

死んでしまえばすべてが終わるのではないか！(お酒を飲んで衝動的に自殺)¹⁴

死にたいと思ったことは多い。しかし、それもひと時で、また、死にたくなる場合が多かった。けれども今は違う。ふと死後の世界が知りたく、死を期待する。もし私が生まれ変わったら今よりはるかによい人生を送りたい。今は生に飽きて疲れた。もし天国と地獄があるとしたら、私は地獄に行くだろう。長く書くのもいやだ。もう恨めしいこの世界ともサヨナラだ。¹⁵

第三、「自殺すれば苦痛から逃れる」という考え

自殺は解放の行為、私たちが到達できる最も極端な最終形態の自由¹⁶

大変な境遇に落ちると、その大変さから「解放」できるだろうという期待から自殺衝動を感じる人が私たちの周りには多い。自殺者は死を通じて一種の休息を取りたいと思う。「死ぬと永遠の安息が得られるか」¹⁷。自殺者たちは自殺で全部が終わることを期待する。死ねばすべてが解決することを願う。

それでは、果たして自殺は我々に解放や自由を持つてきてくれるのか。苦しい現在から自由になれるという考えから自殺を選択することは大きな勘違いである。ある自殺者は「自殺した後何が起こっても関係ない」¹⁸

と言うほどであった。自殺で全部が終わり、何もかまわないのであれば、彼の言う「自由」とはいったい何であろう。¹⁹自殺で全部が終わると主張するのであれば、このような主張に伴う結果について最後まで責任を取るべきだ。²⁰

三 自殺賛美論の死の理解に対する批判的検討

それでは自殺すると果たして問題が解決できるかを正確に検討する必要がある。自殺すれば彼の希望通り、現実の苦痛から逃れることになるか。自殺予防のためには、自殺すればどのようなようになるかを正確に教えることが重要だ。自殺者の望む通りになれるか、生死学の観点から精密かつ正確に検討する必要がある。

自殺を人間の「自由意志」に基づいた行為と見なす見解、自己判断によつて自殺してもよいという考えは、韓国社会の非常に多くの人に広まっている。フランスの文筆家のジャン・アメリー (Jean Améry) は、『自殺する——自由死論』(On Suicide: A Discourse on Voluntary Death, 1976) において、虚無主義的で自伝的な色彩が濃い視線から自殺問題を捉えた。彼は数少ないアウシュビッツの生存者の一人であったにもかかわらず、この本を出版してから二年後に自殺した。この本で彼は「自殺とは当事者の自由意志による決定だから、自殺という用語の変わりに「自由死」という表現を使うべきだ」と自らこの言葉を好んで使用した。アメリーは自殺をヒューマニズムと尊厳性の概念を活用して定義している。すなわち、人間は自殺することによつて当事者の自由と尊厳を守護し、そして幸福を感じるということである。²¹彼は「自分の存在」が社会のものである、教会のものでなく、「自分自身のもの」であると主張し、「自殺行為の社会的復権」を図った。

自殺は矛盾したものであるが、依然として私たちの前に置かれている唯一の、広く自由な世界へ向かう道である。自殺は不条理ではあるが、いい加減なことではないということだ。なぜなら自殺の不条理性は生の不条理性を増大させるのではなく、減少させるからだ。²²

アメリカの自殺はこのような自殺観を実践したものである。すべての存在証明を否定された彼にとって、自らが死の主人になることこそ、最後の、また最も確実な存在証明であつたわけである。アメリカが自分の本で主張している自殺に対する見解は、自殺者の遺書に見られる内容と類似点が多い。彼の「自由死論」は一見して人間の自由意志を主張した意味深い省察としても読み取れるが、その中味は自殺に対する誤つた視線や死に対する思慮の足りない考えで一貫していて、感性的な論理に直ちにとらわれがちな若者たちに誤つた価値観を植えつける危険性が高い。

第一に、「自殺は人間だけの固有権限だ」²³という主張。自殺は人間だけが有している固有の現象であるかもしれない。自殺がそのような可能性を実現するものであるならば、自殺した後に当事者に起こることはどのように見ればいいのか。それも人間だけの尊厳性と言えるか。理性、万物の霊長、科学の発見など、さまざまな側面から人間らしさが規定できる。死という絶対的な瞬間の前に、自分の生を整理し、淡々と明るい微笑みの中で死を迎えることこそ、人間が到達できる最高の成就である。それに比べて自殺は人間の固有性を実現しうる可能性というよりは、むしろ人間らしさを一挙に廃棄する愚かな行為である。自然に訪れる死に臨んで、淡々と明るい表情でこの世をたつ人々の崇高な姿こそ、人間の尊厳を表すことである。

第二に、「自殺を通じて最高の形の自由が実現される」という主張。²⁵自殺こそ最高の自由という言葉ほど、とんでもない詭弁はない。果たして自殺を通じて実現される最高の形態の人間の自由とはいったい何だろう

か。すでに自殺した人たちはそのような自由を満喫しているか。私は今まで、自殺を試みたものの失敗した人たちから、このような言葉を一度も聞いたことがない。自殺が何を意味するか、死が何を意味するかを少しでも知っている人であれば、このような無責任な発言はしないだろう。上記の発言は自由というより自暴自棄から出たか、それとも生と死の本質を見抜く知恵がないからだと言っただけか。²⁶

第三に、「自殺は非人間的な生から人間性を守る唯一の行為だ」という主張。²⁷このような言葉は自殺者が残した遺書からよく見られる内容である。実際、私たちが生きている社会で人間として耐え難い境遇に出くわすことも当然である。しかし、自殺することによってそのような生から逃れることができるか。²⁸自分の生が非人間的だといって自殺するしかないと考え、成熟した人間が取るべき行動ではない。しかも自殺することによって侮辱的な状況から逃れることを期待するというのは全然辻褄が合わない話である。

第四に、「自殺する瞬間、自殺者は自分の過去と無関係になる」という考え。²⁹自殺する人は心の中でこのように願いながら死ぬ場合が多い。苦しい現実、解決策が見つからない状況から逃れたい心情から最後の選択をすることが自殺であるだろう。自殺者は自殺を敢行することによって、自分の不幸な過去とは断絶して自由になることを願うものの、彼の存在は彼が生きてきた履歴と自殺行為から無関係になることができない。包丁で大根を切るように、今日の生と明日の死が分けられるはずがないからだ。彼が生きた生、自殺行為、そして自殺以後の生、この三つは決して断絶することができない。自殺する人は自分の生の履歴から逃れることを願うけれども、生の履歴だけでなく、自殺によって起こる因果関係からも決して逃れられない。

第五に、「私たちには自殺する権利があるから、生のみが最高という独断は廃棄された」という考え。³⁰死が生と同様、個人に属する権利であるという主張には全面的に同意する。しかし、自殺を通じて生と同等な死の権利を行使しても良いという主張は独断といわざるを得ない。自殺行為は生の権利だけでなく、死の権利まで

も廃棄する行為だからである。私たちには自殺する権利があるのではなく、人間らしく生きる権利、人間らしく死ぬ権利があるのみだ。自殺は人間らしく生きる権利と尊厳をもって死ぬ権利を一挙に廃棄する愚かな行為に過ぎない。

第六に、「自殺は自分の絶対的な個性、絶対的なアイデンティティーの表現である」という主張³¹。自殺を通じてのみ、自分の存在の絶対的な個性、絶対的なアイデンティティーが表現できるならば、それほど悲劇的なこともないだろう。自分の存在が自己に属することは当たり前のことである。自殺はむしろ、自分の存在を破壊するため、自己存在の絶対的なアイデンティティーを廃棄する行動である。健全な生と健全な死があるように、死にも健全な死に方とそうではない死がある。人は誰も健全な生を願うのと同様に、死ぬ時も健全な死に方で生を締めくくるのは当然の道理である。しかし、自殺こそ健全ではない死に方の代表的な事例である。³² ジャン・アメリーのアイデンティティーの分裂が彼を死に追いやったというレビエの分析は正鵠を射たものである。³³

四 自殺予防の解法の模索

韓国社会における自殺の事例は、特定の原因や特定の社会に限られたものではない点で、より深刻さを感じさせる。韓国社会で自殺は言葉通り「各界各層」において「多種多様」な動機から行われている。ただし、すべての自殺の事例には共通点が一つ発見できる。それは正しい死の観念の欠如によって自殺が行われているということである。多数の自殺者の事例を追跡してみると、「死」に対する正しい理解や自覚が皆無である。彼らは自分に押し迫った現実的な苦難を解決する唯一の脱出口がまるで「死」にあるかのようにあまりにも容易

く自殺を敢行する。自殺者は死が何を意味するか、自殺の以後どれほどむごい状況が自分に近寄るか全くかまわない。彼らがこのような選択をするのは、日頃、死についていかなる理解も準備もしたことがないからであろう。

「ウエル・ダイング (Well-Dying)」の概念と自殺予防について長らく考えてきた筆者にとつて、自殺を大幅に減らせる対策は、死や自殺に対する正しい見方がもてるように生と死の真の意味を教育すべきだということである。自殺に対する根本的な解決策は、結局、明瞭かつ断固たる語調で「死とは何を意味するか」、「自殺は何を意味するか」、「死のことが分かれば自殺しない」、「自殺してはいけない理由」などを多様な年齢層の目線に合わせて提示する教育にある。死について教育すれば、自殺がいかにひどい自害行為か、人々は自ら気づくようになる。自殺予防は自殺そのものに対する短絡的なアプローチ、弥縫策、行き当たりばったりでは効果が得られず、韓国社会での死に対する理解と臨終の方式に対する総体的な問題提起が先行するべきである。

ところで、自殺者たちが残した遺書を分析すると、「生きるのが苦しい」「世の中と決別する」「自殺すれば苦痛から逃れる」といった表現もあったが、「生きたい欲求」もまた表出されていた。自殺者は生と死の分かれ道に立ち、死の方へ移行する。しかし、根本的に自殺者が願うのは死ではなくまさに生であった。自殺者は死にたかつたのではなく、生きたかつたのだ。自殺者は、生きたいのに現実の苦痛によって生きづらくて仕方なく自殺に飛び込むだけである。

ある自殺者は生活のために宝くじを購入し、自殺のためにカッターナイフも用意した。自殺者の前には二つに分かれた道がある。未来のために宝くじも買い、自殺のためにカッターナイフも買うなど、悩みに悩んだ。「生きる?」なら職場はどうする? また戻つてちゃんと適応できる自信はあるか? ……これもあれもだめだ …… どう生きたらいいの …… ちよつとだけ生きる方に心を傾けてみただけで、何もうまくいかなくて、た

だ大変なだけだ」³⁵。生きるために最後まで握っていた宝くじというロープが切れてから、彼は結局自殺を選択した。

三回の離婚、三回の傷、怖い、死ぬのが……。あ……³⁶

死、怖くて避けたいけれども……³⁷

死ぬ時、痛くないのか。痛いのはいや……何度決心しても死ぬのは大変みたい。ちよつと怖い。とても寂しいよ。³⁸

ある自殺者は遺書に、自殺は最悪の選択であると記した。³⁹自殺者も死は怖い。死を避けたいと思う。自殺者は死ぬために、自殺したいから自殺するわけではない。生にこれ以上留まることができなくて自殺するだけである。⁴⁰ある自殺者は死にたいと一〇〇回以上思った。「死んだら終わるか、死んだらやすらぎを得るか」と悩んでいる。だから自殺者は死にたいのではなく生きたいのである。生きづらいから、自殺へ飛び込むだけだ。自殺者たちもやはり死に対する恐怖と不安の感情がある。したがって、死に対する正確な理解に基づいて「死んだといってすべてが解決するわけではない」「自殺すれば全部終わるのではない」という事実を正確に、また明瞭に、そして、断固に教えることができれば、自殺予防に大きく役立つだろう。

五 おわりに

死生学の観点から見ると、自殺現象の根底には「死に対する誤った認識」が置かれている。実際、死の問題に比べると自殺自体はそれこそ氷山の一角に過ぎない。海の下に浸っていて我々の視野には入らないが、自殺現象の中核には韓国人が死を迎える方式の問題が関わっている。死に対する理解と臨終を迎える方式に問題が多い故、結果的に自殺が頻繁に行われるのである。自殺現象を理解し、効果的に予防するためには自殺そのものに焦点を合わせるより、水面下に潜んでいる死に対する誤解と偏見、不幸な死に方に対する深層的な反省と共に、新しい方向を模索することが急務である。目の前の自殺だけを問題化し、正しい死に方を教えることに関心を注がなければ、韓国社会の自殺率は決して下がらない。正しい生死観が定立し、韓国社会に成熟した死の文化が定着できれば、自殺率は自然に減少するだろう。⁴¹

自殺問題より死への理解と臨終方式がはるかに重要だという言葉の意味がまさにここにある。人々は幸せな生を願うだけに、切実に健全な死に方を願う。しかし、実際に大多数の人々は不幸な死を願うかのように、死について見当がつかず、不幸で苦しい死を迎えたりする。自殺は不幸な死の一つの事例に過ぎない。

これまで自殺者の遺書を中心に考察したとおり、自殺現象の根底には、「死に対する誤った認識」が置かれている。死ねば全部終わるから、自殺と共に生の苦痛をも終結すると自殺者たちは勘違いする。翰林大学でインターネット講座「自殺予防の哲学」⁴²を通じて死と自殺に対して教育を受けた、自殺を試みた経験のある学生たちは、それ以後は自殺を考えない。自殺しても問題が解決できないという事実を教えてからである。今まで約一五〇〇人を教育してきたが、自殺予防の効果は99%以上であった。二〇一二年度前期の「自殺予防の哲学」の受講生四八人を対象に授業を受ける以前と以後の意識状態を詳しく調査した。四八人中、自殺関連の

高危険群の学生は一六名、33%であった。サイバー授業であるため学生と直接会って面談することなく、一五週間サイバー上で教育したところ、高危険群の学生ももう自殺を考えなくなった。一学期の間、生死学中心の生命教育をサイバー上でだけで教育した時にも、教育効果は高かった。

インターネット講座「自殺予防の哲学」を通じて死や自殺に関する教育を受けた後、以前自殺を試みた学生たちはもう自殺を考えなくなった。自殺しても問題は解決しないことを教え、動画を通じて自殺した後、より大きな難関にぶつかることを直接見せたからである。⁴³

自殺率は今まで韓国社会で解決しようとする持続的な努力にも関わらずいっそう増加しつつある。自殺予防が死に対する十分な理解なしにその場しのぎな対応と行き当たりばつたりの政策を中心に行われてきたからである。生命教育を通じて学校と社会で、死は何を意味するか、なぜ自殺してはいけないか、どのように生きたらいいか、また生をどのように終えればいいのか、落ち着いて教えることがまさに自殺予防の基本である。生命教育を通じて死と生に関する理解を増進させ、死の質と生の質を向上させれば、自殺予防の土台もまた自然に築かれるだろう。

■註

- 1 『アジア経済新聞』二〇一一年五月三〇日。
- 2 『ハンギョレ新聞』二〇一三年二月八日。
- 3 『朝鮮日報』二〇一一年一月一日。
- 4 「韓国社会は精神的廢墟の中にある。我々が直面した危機状況の深刻性は決して軽くない。西洋ではシェイクスピアやゲーテを読んでも今日を生きるに役立つというが、韓国では今、誰が沈清伝を読んで親孝行を語るであろうか。心

の中で繰り返し返されなければならない精神的省察が爆撃されてもないのに全部無くなってしまった点で、我々も精神的には戦後のドイツと同じく廃墟の中にある。今韓国社会が歴史上のどの時代よりも大きい外面的な繁栄を謳歌しているにもかかわらず、国民が幸せを感じえないのは、共同体の崩壊によって精神まで崩壊してしまったからである。韓国社会の不幸を治癒するためには、巨大大衆化された産業社会にふさわしい新たな共同体の価値の模索と定立が必要である。」『中央日報』二〇一四年一月二二日。

5 自殺者の遺書に関連する研究がほとんどなされていない状況の中で、朴ヒョンミン博士は二〇一〇年に『自殺、次悪の選択』を出版した。研究者が自殺者の遺書に接することは難しいが、朴博士は韓国刑事政策研究院の연구원として、警察の助力を得て、一三〇〇件余りの自殺事例と四〇〇〇件余りの遺書を集めることができた。彼は社会学を専門にする研究者であるだけに、社会科学的分類に焦点を合わせて研究を進め、筆者のように、自殺者の遺書に表れた死に対する理解に注目した研究を進めているわけではない。また、フランスの Jean Anctin (一九一二〜一九七八) は、*On Suicide: A Discourse on Voluntary Death* (1976) を著述してから二年後に自殺したが、この書物には自殺者の死に対する理解がよく現れている。このテキストについて「三 自殺賛美論の死の理解に対する批判的検討」において集中的に分析する。

6 朴ヒョンミン『自殺、次悪の選択』、イハク社、二〇一〇年、一一六頁。

7 呉進鐸『自殺、世の中で最も不幸な死』、セジョン書籍、二〇〇八年、一〇一〜一〇二頁。デヒョン君のことが好きな女学生は、偶然にも不良サークルのリーダーが好きだった女の子であった。彼らは随時デヒョン君を呼び出して暴力を振るつた。デヒョン君は羞恥心と侮蔑感で学校生活が地獄と化した。デヒョン君は死を選択することでこれ以上暴力に苦しめられず、女学生にも純粹な自分の気持ち伝える方法として自殺を選択した。デヒョン君は一九九五年六月八日深夜三時頃、マンション五階の自分の部屋の窓から飛び降りた。高校一年生になってから三ヶ月後の出来事であった。デヒョン君の父親は息子の死を海外出張中に知った。当日急いで帰国して自宅に帰ると、奥さんも死ぬ寸前の人のように辛そうであった。デヒョン君の無線呼出機に残っていた記録を調べて、デヒョン君の死が繰り返された暴力と直接的な関連があったことが分かった。呉進鐸『最後の贈り物』、セジョン書籍、二〇〇七年、一九二〜

一九四頁。

8 仲良くしていた友人の自殺を防げなかったある学生の心痛む話は、自殺がどれほどひどく残された者の靈魂を荒廃させるのかを如実に表している。洪君は高校時代、自律学習という名目で学校に来て勉強をさせられた。運動中の休み時間に教室に戻り、隣に座っていたジンヨン君と洪君は雑談をしていたために先生に呼び出された。「普通の学生」であった洪君は棍棒でお尻を数回叩かれてすんだが、運動部であったジンヨン君は平手打ちされ始めた。先生の手を避けるためジンヨン君は無意識的に手を振り動かしながら避けたが、その手に先生が押し倒された。先生は興奮状態で悪口を吐き出しながらまた殴り始めた。先生と同じくらい顔が赤くなったジンヨン君は、一緒に大声で叫びながら悪口を吐き、興奮したあまりに先生を投げつけてしまった。先生は床に投げられたまま叫び続けていて、ジンヨン君はいきなり教室の窓に向かって走り、そのまま窓の外に身を投げた。その日から高校卒業まで、洪君は常に不眠症に苦しめられた。バスの中の居眠り中でも悲鳴を上げて目覚めたりもし、精神科で処方された睡眠剤でも休めなかった。呉、二〇〇七年、一九四〜一九七頁。

9 朴前掲書、二二二頁。

10 朴前掲書、一〇三〜一〇四頁。

11 呉、二〇〇八年、二六頁。

12 二八歳男性、鬱病で長年苦勞し、息をしているだけでずっと前から死んでいると思っていた。彼は何度も自殺を決心したが死ぬこともままならず、結局自分もつと駄目になる前に、自尊心を守りたいと言った。「家族たちに何とか言いたいけれども、何も言うようがない。心の中は言葉でいっばいなのに、字に書けないね……授業も受けられず覚えることもできない。実は、私ずっと前からこんな状態だった。一瞬一瞬が悲惨なの……何度決心してもやっぱり死ぬことって難しいね。怖い、とても寂しいし……私、息をしているだけで、精神はずっと前死んでしまったみたい。辛くなつてからももう一〇年だね……はあ……とてもつらい時間だよ……幸せになりたかったのに……お母さんに会いたい。もうお金もないし……部屋ものすごく寒い……誰かに頼りたいけれども、誰も私のことを受け入れてくれなさそう……疲れる、とてもつらい。壊れる日、守ることが難しい。壊れていく自分を見つめるのが辛い。私に最後に

- 残っている自尊心を守ってあげたい。」朴前掲書、一二七頁。
- 13 呉、二〇〇八年、一三四頁。
- 14 呉、二〇〇八年、一二〇頁。
- 15 呉、二〇〇八年、一三九頁。
- 16 トーマス・ブロンニッシュ、イ・ジェウオン訳『自殺』、イクリオ、二〇〇二年、一二三〜一二四頁。
- 17 ブロンニッシュ前掲書、一一七頁。
- 18 ブロンニッシュ前掲書、一二二頁。
- 19 二〇〇六年に実施した自殺予防専門課程を受講した老人病院の看護師は、筆者に義兄の自殺に関する話を聞かせてくれた。「一九九七年末の IMF の経済的な苦しみの中でもがきながら農薬を飲んで亡くなった義兄の死が脳裏に浮かび、私はインターネット動画で授業を受けながら涙を禁じ得なかった。ある日、私が義兄から無力感と倦怠と憂鬱を感じ取った時は、すでに義兄が自殺を深く考えていた時期であった。義兄の深い鬱状態を感じて、入院することをお勧めながら、義兄に死んでもすべてが解決するわけではないと、漠然としてではあるが、説明した。翌日病院から姉の電話がかかってきた。「山の中から義兄の咳が聞こえたけれども、降りてこない。」一一九を呼んで山の中を数回上ったり下りたりしてやっと義兄を見つけたが、もう意識がない状態であった。病院に移送して救急措置をしたが、農薬が全身に広がっていて手遅れ状態であった。ICUでの三日間、義兄は「もう一度生きることができれば、精一杯生き抜こう」と言った。「あまりにも苦しめて耐えられない、後悔している」とも言い、「助けて」とも話した。義兄を看取りながら、自殺する人が後悔と悔恨の涙を流しながら苦しむ姿をすべて見られた。」呉、二〇〇八年、四〇〜四一頁。
- 20 自殺を試した人々の経験談を聞いてみると、例外なく、自殺を試みた後、仮死状態で怖い苦痛に接したことについて話している。「現実よりもっと怖くて苦しい経験」をするというわけだ。このような話は『最後の贈り物』で紹介した「催眠治療技法」を通じて何回も明らかになった。精神科専門医の金ヨシウ博士は催眠治療技法を通じて、自殺した人がどのような状況に接するかを詳細に報告している。催眠治療技法は、ほかの治療方法ではなかなか治らない

- 心の病を患っていた患者たちに、過去の人生における記憶と感情を整理させ理解させることによって、患者を苦しませた症状を大いに緩和する治療方法である。催眠療法法の歴史こそ浅いが、すでに数年前からアメリカの精神科の教科書に収録され、公認された治療方法の一つとして認められている。呉、二〇〇八年、四一〜四三頁。
- 21 プロニッシュ前掲書、一一八〜一二六頁。
- 22 徐京植『ブリーモ・レーヴィへの旅』、創批、二〇〇六年、一七三頁。
- 23 プロニッシュ前掲書、一二五頁。
- 24 スコット・ニアリング (Scott Raring) は、彼の最後の瞬間において、平穏で威厳に満ちた品格高い死の典型を見せてくれた。普段から「死の方式は私が生きてきた生の方式の反映だ」と言っていた彼は、もう自分の荷物が運ばない、自分のことが自分で処理できないようになると、死の準備を始めた。スコット・ニアリングは一九六三年に「周りの人に差し上げる言葉」を初めて書き、一九八二年この文章を再び修正した。「私は死が進行していく過程を一つ一つ感じたい。どんな鎮痛剤、麻酔剤もいらぬ……私は最善を尽くして生きてきたので、喜びでまた希望に満ちた心で死を迎えようとする。死はほかの世界に移ること、あるいは目覚めだ」。死ぬ一ヶ月前のある日、それは一〇〇歳になる一ヶ月前でもあったのだが、彼は飲食物の摂取を中断することによって、徐々に、上品に、そして平和に、肉体の衣を脱ごうとした。彼はその頃、「楽しく生きてきたので、楽しく死ぬ。私は自分の意志によって自分から離れる」という言葉をよく口にした。一九八三年八月二四日の朝、彼の妻、ヘレンはスコットが死んでいくことを見守った。ゆつくり、彼は自分の肉体から逃れるため、だんだん息を弱くし、まるで乾いた葉が木から落ちるように息を止めた。彼は全部がちゃんとできているかを試すかのように、「よし」と言って最後の息を吸って旅立った。ヘレンはスコットが見えない世界に移っていったことを感じた。ヘレン・ニアリング、李ソクテ訳『美しい人生、愛、そして終わり』、ポリ、二〇〇九年、二二四〜二二九頁。
- 25 プロニッシュ前掲書、一二二、一二五頁。
- 26 Wさん(女性)は、職場に恋人がいた。しかし、恋人にWさん以外の彼女がいることを知ったWさんは彼と別れようとしたが、ただ死ぬことと死ぬ方法だけを考えるようになって衝動的に自殺を試みた。彼女が病院のベッドで目覚め

たのは四六時間後であった。仮死状態で、彼女は今まで経験したことのない苦痛を味わった。炎々たる炎の中に体が浮いていて、まるで電子レンジの中で燃えているようであった。彼女は自殺が未遂で終わった後、次のように語った。「私の場合、実は自殺しなければならぬ理由はなかった。ただ、彼に『私、死ぬから』といったことがきつかけになって、その後死ぬことだけ考えるようになった。今は自殺が未遂で終わったことが何よりだと思う。医師の声が入りこえて、自分が生きていることが分かった時に、『あ、良かった！』と思つた。自殺を試みて、一時的に経験した死後世界の怖さや苦しみを思うと、生きている時の苦勞なんかとは比べものにならないと、Wさんは証言する。彼女は自殺体験を通じて、死ぬことよりちゃんと生きることがより重要だということが切実に分かつたという。自殺しても楽にはならないとも語つた。明るい死を準備するフォーラム資料集『急増する自殺、どうすべきか』、二〇〇四年一〇月二十九日、四七頁。

27 プロニッシュ前掲書、一二五頁。

28 中小繊維会社の社長Sさんは、会社の財政状況が難しくなり、奥さんも競争会社の専務と逃げてしまった。彼は事業を縮小し、家も抵当に入れたが、会社を救うことはできなかつた。袋小路に入った彼は自殺を考え始めた。彼は、死ぬことを恐れず、死ぬことでいいことだけがあると勘違いしていた。自殺することで、現実の苦痛から逃れ、保険金をもらつて借金の返済もある程度でき、自分は死後の世界で新たな生活ができるという、空しい望みを抱いていた。彼は一九八四年七月三日、ロープで首を吊つた。しばらくして彼は病院のベッドで、「お、意識が戻つたか」との友人の声を聞いてやつと目を覚ました。自殺は未遂であった。彼は仮死状態で約七時間経験した恐ろしい死後の世界を一生忘れられなさそうであった。彼は現実より恐ろしくて苦しい死後の世界から救出されたことを幸いと思つた。仮死状態ですらそのようなひどい目にあつたのだから、本当に死んだのであれば……。自殺行為で苦痛を経験した彼は二度と自殺のことを考えないことにした。明るい死を準備するフォーラム資料集、二〇〇四年、四八頁。

29 プロニッシュ前掲書、一二六頁。

30 プロニッシュ前掲書、一二〇～一二二、一二六頁。

31 プロニッシュ前掲書、一二二～一二三、一二六頁。

- 32 自殺する人たちが残した遺書を読んだり自殺衝動を感じる人々の話を聞いたりすると、大体が人間の死と生に関する深刻な誤解によつて自殺を選択する。最も多い誤解は、次の四つである。一つ目の誤解は、「なぜ私だけ苦しめられるのか」という理由から自殺する場合である。生きているうちに、多かれ少なかれ、苦痛や苦難の瞬間を経験しない人は誰もいない。いや、生の苦難こそ我々の人格と魂を成長させる贈り物かもしれない。それが自殺の理由になるならば、世の中に生きている人は一人もいないであらう。二つ目の誤解は、「自殺すれば現在の苦しみからすぐに解放される」という勘違いである。この場合も、自殺に対する無知に起因する点で、前のケースと同様である。このような勘違いは、死んだ後の生について全く考慮したことがないからもたらされる誤解である。自殺が苦痛を軽減するどころか苦痛を増幅させることは、何人もの自殺者や自殺未遂者が証言している。三つ目の誤解は、「この世界と社会が私を自殺させる」と主張するものである。このような人は、自分が置かれている難しい状況を社会的な不平等や構造的な矛盾がもたらした結果と考え、自分の自殺を正当化しようとする。人間が社会的な存在である限り、誰でも社会の構造的な問題の被害者になりうる。しかし、生と死の問題は究極的に自分自身の問題である。社会は私の生活に影響は与えうるけれども、社会が自分の代わりに生きることができないし、また自分の代わりに死ぬこともできない。四つ目の誤解は、「自殺すればこの世と完全に決別できる」と思う場合である。生の苦痛からであろうが実存的理由からであろうが、うんざりするこの世に別れを告げたいという欲求は、死を生と完全に断絶されたと思ふことから生じる。しかし、このような勘違いもまた死に関する間違つた認識に発したものである。死は生との決別ではなく、生の締めくくり、生のもう一つの姿、そして生の延長だからである。吳、二〇〇八年、一五六〜一五七頁。
- 33 徐前掲書、一七三頁。
- 34 吳進鐸『自殺予防 解法はある』、教保文庫、二〇一三年、六五〜九二頁。
- 35 朴前掲書、一二四頁。
- 36 朴前掲書、二二二頁。
- 37 朴前掲書、一三四頁。
- 38 朴前掲書、四八一頁。

39 「最悪の選択、それは死……。もう本当に生も死もすべてが面倒くさい。」 朴前掲書、一一八頁。

40 朴前掲書、四五七頁。

41 「これから私に許された時間が長くないことが、医療者らの意見です。皆様が私によって悲しんだり惜しんだりされないようになることが私の小さな願いです」。二〇一二年二月三日六八歳で幽明界を異にしたカン・ヨンウ博士の生は一つのドラマである。彼は二四歳の時サツカー試合中に受けた目のけがによって失明した。また奇しくもそのことと前後して父親と母親が亡くなった。刻苦の努力の末、一九七六年、アメリカのピッツバーグ大学で教育博士号をとり、二〇〇一年には次官補級のアメリカ・ホワイトハウスの国家障害委員会の委員に任命された。彼は生の絶えることない逆境で、汗と血を流しながら生の道を開拓していったのである。「私が歩んできた人生は普通の人より大変でした。けれども結果的に悪いことのお陰で私の人生には良いことが多かったです。諦めないでください」。『中央日報』二〇一二年二月二五日。

42 インターネット講座「自殺予防の哲学」では、毎週二時間の講義と四つの関連動画が提供される。毎週の講義は該当一週間だけ、アクセスが可能であるように接続期間を制限し、インターネットで受講しながらノートを取り、毎週受講の感想を掲示板に書き込むようにしている。受講生たちに、この講義は三単位を取るための科目ではなく、死と自殺、そして生に対する認識を画期的に変える科目であるから、毎週、真面目にまた根気よく受講するようにと勧める。講義内容を見てみると、第一講から第三講は社会病理現象として自殺問題を扱う。第四講はジャン・アメリーの自殺賛美論を生死学の観点から批判的に検討し、第五講から第七講までは死について理解すれば自殺しないという主題で講義を行う。第八講から第一〇講までは自殺しても全部が終わるのではなく、より大きな苦痛をもたらすという主題で講義を行いながら、関連する映像資料を通じて、自殺するかどうか、その結果を間接体験できるように教育する。第一一講と第一二講では、動画を利用し、死の体験と死に関する願想を行うことで、有意義な生を送り美しく生を締めくくることが重要性を実感できるように導く。最後の第一三講と第一四講では自殺を試みた経験のある受講生たちが教育を受けた後、どのように変わったかという変化事例を具体的に提示し、動画を通じて肉声証言を直に見聞させる。

高危険群に属していた学生たちも次のような意識変化を見せた。「自殺は現実から逃げるだけであり、苦痛から脱するのではないと分かった。自殺を通じて現実から逃げるのではなく、試練を克服するために努力すべきだという事実を学んだ。講義の受講で私自身がこれくらい変わるとは想像もできなかった。」（趙さん（女性）は友達の自殺、性暴力被害や妊娠中絶の後遺症によって、何回も自殺を試みていた。）「生きていて、辛酸をなめ尽くした。鬱に苦しめられ、病院にも通ったが治らなかった。授業を受けて肯定的に変わり、世界を見る視線も大きく変わった。友達が自殺するとか言ったら、今の私は十分に彼らを説得できるほどだ。」（金さん（女性）は鬱病で精神科の治療を受けていた。）「私は自殺すれば全部が終わると思い、自殺衝動をよく感じていた。この授業を受けても自分の考えが変わるとは、初めは信じられなかった。しかし、最終回の講義まで受講するまでもなく、私の考えはすでに変わっていた。以前の私の考えは間違いであったことが分かった。数人の友達と一緒にこの授業を受講したが、いくらい辛いことがあっても自殺は決していけないという事実にみんなの意見が一致した。」（社会学部所属の鄭さん（女性）は自殺衝動を感じており、また友達が自殺していた。）

（オ・ジンタク 翰林大学人文学部教授）

（イ・ブヨン 韓国外国語大学非常勤講師）